

---

# オストリア雑貨店へようこそ

千春

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オストリア雑貨店へようこそ

### 【Nコード】

N7358X

### 【作者名】

千春

### 【あらすじ】

とあるファンタジーな世界で雑貨店を営む青年・クリストファーの日々を描いた物語。

チュンチュンと鳥が朝日の中で鳴く頃俺は布団の中で目を覚ました。

春先の暖かな日差しの中でありながら少しだけ冷たい空気にもう少しだけ寝ていたいと感じ、今日はこのまま布団の中で過ごすと言う魅力溢れる考えも頭の中に浮かぶがここはどうか押さえ込み上半身を持ち上げる。

「今日の予定は何だったか」

最近一人暮らしに慣れてきたからか段々と独り言が増えてきた。前までは師匠のところに住み込みで従事していたからこんな事も無かったのだが。

一人立ちを命じられ、ここ、オストリアにやってきてからすでに一年がたった。最初の頃は周囲の商店の方々に受け入れられなかったが月一の商店街会合において自作の酒を振る舞い、一瓶一気飲みを披露してからと言うもの見事に受け入れられた。

ただし事あるごとに俺に一気飲みを求めてくるのは勘弁して欲しい。

起き上がり朝食を軽くとり身支度を整えると俺は自宅兼店舗から外に出て自分の店を見上げる。

そこに書かれているのは仲良くなった大工に作ってもらった自慢の看板、オストリア雑貨店の看板だ。

「今日も一日頑張りますかっ！」

俺はドアにかけられたパネルを裏返し開店中と書かれた面を表に

する。

俺の名前はクリストファー、王都オストリアにて錬金術を使った  
雑貨店を営んでいる。

「ようクリスっ！ 実は……」

「酒なら売れませんかよ、アンナさんに売らない様に言われているので」

「マジかよ」

ある日の昼下がり、雑貨屋でノンビリと本を読んでいた俺のところにやってきたのは鍛冶屋を営んでいるグレンさんだ。最近年齢が四十を突破したはずなのだがその腕は筋肉に覆われており、そこからは衰えなど微塵も感じられない。

アンナさんというのはこの人の奥さんで、気が強く筋肉隆々のグレンさんが尻に敷かれるほどだ。もちろん力ではアンナさんに勝ち目があるはずが無いので、おそらくグレンさんの惚れた弱みと言うヤツだろう。二人が一緒にいると喧嘩しているようでも周りにいつも笑顔が絶えない、そんな夫婦なのだ。

「って今回はそうじゃないんだよ。良い話を持ってきたのさ」

「良い話？」

グレンさんからは酒以外の話を聞いた事が無かったので思わず驚いてしまった。

このグレンさんは俺がやった一瓶一気飲みを見て一番に気に入ってくれた人で、今でもかなりお世話になっている。たまに家にお邪魔させてもらって夕飯をご一緒させていただくこともたまにあるくらいだ。

「今度魔法学校が出来るってのは知ってるだろ？」

「ええ」

魔法と言うのは自身の持つマナと呼ばれるものを使って行うもので、才能がなければ出来ないとされている。今までは一人の師匠の下につき、そこで秘伝の技を教わると言うのが普通だったのだが、この度魔法学校と呼ばれる魔法の教育機関が作られることになったのだ。

なんでも「魔法を使える者を増やす」と言うことは国の発展につながる「らしい」。

俺も師匠の元について魔法の一種である錬金術を学んだ身であるがゆえにその利便性も知っているがその技術の難しさは存分に理解しているつもりだ。

実はマナと言うのは万人が持っているもので、その量と操ることが出来るかどうかで魔法を使えるかが決まってくる。量は使い続ければ増えるがやはり元が多いものほど有利なのは変わらない。マナの操作だって感覚の世界なので才能がいる。

俺の場合にはギリギリ自分で知覚できる程度だったが、師匠がとても優秀な方だったので一人前になる事が出来たにすぎない。

魔法と言うのは才能が全てなのだ。

だからこそ、その絶対数は少ない。ただしその威力は強大だ。たった一人の大魔導師によって一つの軍隊が足止めさせられた事だっ  
てあるらしい。

おそらく今回の教育機関もそこら辺が目的なのだろう。隣国との関係悪化が囁かれている現在、戦力確保は重要な問題になっている。今はまだ開戦には踏み切っていないが、今のうちに優秀な人材を確保しておきたいのだろう。

魔法の学校を開くと言うことはそれだけの魔導師を国に集めるという事とイコールだ、そして普通なら引き籠もり、自身の技術を隠しながら一人に伝えていく魔法と言う技術が教わることの出来るチ

ヤンスも増えると言うこと。即ち、他国の未来の人材を減らす事にも繋がる。

長期的に見た他国の戦力の低下と自国の軍事力強化が目的となるのだろう。

もし自国に戻って魔法技術を伝えられるのが嫌ならば「オストリア国民に限る」とでも決めておけばオストリア国民に帰化せざるを得ない。

「なるべく関わりたくないなあ」

俺の本心である。

グレンさんに酒を与えることによってアンナさんに怒られるとはわけが違う。少し失敗したら、もし厄介なことに巻き込まれたら。それだけで比喻ではなく首が飛ぶ、平和でそれでいてノンビリと暮らしたい俺にとってあまり関わりたくない。

「魔法の媒体となる粉を用意してくれるだけで良いんだってよ？ それくらいならどうって事無いんだろ？」

「マジックパウダー？ 確かに簡単に用意できるものではあるけど……」

マジックパウダー、グレンさんのいう媒体と言うのは魔法を使う上で必要になってくるものことだ。これはエビルという木の葉を干して乾燥させ、それを粉末にしたところで魔力を一日中当てて続けることによって出来るモノ。

これは魔法の初心者がマナを感じることに出来ない時に使用するもので、これに込められた作成者のマナを使い魔法を使うことによってマナを擬似的に感じることに出来るようにするものだ。

熟練した魔導師だとこんなものを使用せずとも魔法を使うことが

出来る。

ちなみにマジックパウダーを作るのは錬金術の初歩中の初歩、これを冒険者に売って生計を立てている錬金術師も多い。

以上の説明から分かるとおり、錬金術と言うのは魔法の上位に分類される。

他にもソーサラーと呼ばれる戦略級の魔法を得意とする魔導師、ウィザードというゴーレムのような擬似的な生命を作り出す魔導師、ブリーストという魔法と神秘を融合させ傷を癒す魔導師もいる。

俺がなぜそんな錬金術師なのかと言うと、師匠が凄かったとしか言いようが無い。

「頼むよ、実はこの前お前を紹介してくれってとある方に言われちゃまってよ。どうにかお前の名前を出さなかったんだが、せめて品だけは言われちゃまって断れなかったんだ」

「いや、そのとある方は何で俺の事を知ってたんだ？」

自慢じゃないが俺はこの一年間目立たないように目立たないようにと商店街の人たち以外とはなるべく顔をあわせないようにして、冒険者相手の商売も目立たないように一般的な品を一般的な値段で一般的な質で取り扱っているのに。

「いや、この間酒を飲んだときに『俺の知り合いには腕の良いい錬金術師がいるんだ』って言っちゃまってよ」

「全部グレンさんのせいじゃないですか」

酒の席で俺の事をつい自慢してしまっただけ。確かに魔導師の数も少ないし、さらに錬金術師のような上位となるとさらにその数を減らす。

だが学校を開くと言う以上その学校にだって教師として錬金術師

はいるだろう、それなのにわざわざ俺に頼む必要性がわからない。その事を質問してみると。

「何でも風邪ひいて寝込んでるらしくて最初の講義に媒体の数が足りないんだと」

「医者の不養生とはこの事だ」

正確には医者ではなく薬師だけだ。

俺達錬金術師はその職業上あらゆる薬剤に精通していなければならぬ。そのため冒険者にはマジックパウダーを、市民には薬を売るのが普通なのだ、と師匠が言っていた。もちろん俺もその信条を受け継いでいるので薬を作ることも出来る。

外に出れば食べられるか食べられないか、あの野草はどのような病に効くのか、あの毒草はどうすれば解毒できるのかなど復習も兼ねて様々なことを考えている。

おれくらい出来なければ錬金術師なんて無理なのだ。

「わかったよ。グレンさんの頼みだ、断ることは出来ない」

この一年間、ここにやってきてから一番お世話になった人が頼んでいるのに断る事が出来るはずも無く、俺はその依頼を受けることにした。

期限と個数を聞き、そこで嫌になって断ろうかとも一瞬考えた。

エビルの木というのは結構生えているもので、簡単に見付ける事が出来る。ちよつと葉が刺々しいので人が手を入れているところに生えては居ないが。

それを枝を何本か切り落としてく。低いところを切っていくのでこの木の生長にはあまり影響は及ぼさない。そもそも上のほうにある葉から太陽光を吸収するので下にある枝は邪魔なのだ。無駄な枝は切り落としたほうが成長が促進する。

まあ元々の成長力が高いのでそこまで気にせず一本丸ごと切り倒してしまつても問題は全然無いのだが、なんとなく可哀想な気がしてしまうのだ。

「まあ自己満足だよな」

自分の家の為に何本木が切られたのかは分からないし、あのオストリアを作る為に何本除去されたのかも分からない。

もしかしたら今までの人間の発展の中で邪魔だからと言う理由で全滅してしまつた植物もあるかもしれない。

さて、無事に目標の枚数も確保することが出来たし、次にコレを蒸す事になる。

「あー、釜の大きさはつと」

おお、一番でつかいのでギリギリか。

水を入れ、火を付けて沸騰させてから蒸す為に板を入れていく。そしてその上に茶葉を敷き詰めるのだが、余裕だろうと考えていた釜がギリギリだったので少し驚いた。

蓋をして近くで火が消えないように見張っていることにする。

今日はこの仕事に掛かりきりになるのでしょうがないから今日は雑貨屋はお休みだ。こういう時に店員でも雇ってあげれば良いのだが、どうにも魔導師でない一般人は雇いたくない。

しかし魔導師というのは時間が有れば研究をしたいという性質のやつばかりなので雇うことも出来ない。

「どうしたものが」

まあ今のままでも生活には困らないし大丈夫だろう。

それに今回のこの仕事の報酬は実はかなり破格なのだ、この作業が終れば後は日に当てる乾燥させるだけなのにも関わらず俺の月収三カ月分。これはちょっとリッチな気分が味わえそうだ。

新しい調合器具を買うと言つのも悪くないし、紙を買って自分の魔道書を書くというもの悪くはないかもしれない。夢は広がるどこまでも。

一晩中蒸すと葉は刺々しさが無くなりへなへなとした頼りないものになる。

それを外に出し、虫が食べないように木の皮で編んだ籠を被せて雨に気をつけければ良いのだが……。

「どうすれば良いんだ」

いかんせん量が多い。少量ならば置く場所もあるのだが、ここは街中でさらに少し奥まったところにある。こんな大量の葉を日光に当てられるような所など存在しない。

魔法で一日でやってしまふという事も出来ないわけではないのだが、それだと質的に悪くなる。日光に当てるといふ行為は魔法的には自然が持っている魔力素と呼ばれるものを太陽光を受けながら葉が吸収する意味があると考えられているからだ。

とくに品質は問題にはされていなかったしそうしても良いのだが……しかしこれから魔法の道に進もうという子供達だ、最初くらい質の良い物を使わせてやりたいと言うのが人情と言うモノだろう。しょうがないのでザル一杯に入れられた葉とザル数个を重ねて持つて町の外に行く事にする。流石に持ち切れなかったのでグレンさんに頼んで運ぶのを手伝って貰う事にした。

街道から外れた場所でキャンプするくらいなら誰にも迷惑になら無いだろう。

木の板を地面に敷いてその上に蒸した葉を重ねないように敷き詰めていく、木の板が十数枚必要になったが無事に広げることが出来た。

「あーした天気になあれ」

街道脇に張ったテントの中で俺は無意味にそんな事を呟いた。

天気の日に日光に三日間当て続けることにより葉を乾燥させ、そしてそれを粉末にし、マナを照射し続ければマジックパウダーは完成する。

「あのお、すみません」

「ん？」

乾燥始めてから最終日の三日目、それまで無事に天気に恵まれどうにかこの見張りの作業も終わる事が出来ると鼻歌を歌っていた時、まだ年若い女の声で話しかけられた。

今までは「何やってんだ？」という奇異の目で見られる事はあっても話しかけられるようなことは無かったのに。

俺に話しかけてきたのは短い黒髪の少女だった。いや、訂正しよう美少女だった。おそらく成長すれば世の男達を数人くらい侍らせる事が出来るだろうくらいの。

しかし見たところ気弱そうな所があるのでそんな事はしないだろうけど。

「何か？」

「えっと……」

今でもこうして俺に話しかけておいてオロオロとしている。どうやら人見知りのようだ、なら話しかけなければ良いのに。

彼女の目は俺と乾燥中の葉を行き来しており、俺のやっている事に興味を持っているようだった。

「俺のやってる事が気になる？」

一般人ならばここで「何をやっているのかわからない」と顔に書いてあるだろうが彼女は興味が有りそうな素振りをしている、即ち彼女は関係者だ。

しかも俺がやっている事を知っているという事は錬金術師志望かな？

「は、はい。私もく、薬作りに興味があるんです」

「なるほど」

前にも言ったとおり錬金術師は薬の調合も出来る。医者とは診断して錬金術師は薬を作る、俺の顧客にはいないが医者を抱えている錬金術師もこの世には存在するのだ。

まあ医者が薬を買うのは名の知れた錬金術師ばかりなので医者は俺には一生かかわりの無い職業の一つだろう。

俺はその間も葉の状態を確認していく、どうやら予定通り今日で帰れそうだ。帰ったら今日は休んで明日からマナを込めるのを始めることにしよう、どうにか期日までに間に合いそうだと安心した。

「こ、コレはエビルの葉ですよな？」

「そうだよ、今はマジックパウダーを作っているのさ」

「やっぱり」

そう言うとき彼女は口許に握りこぶしを当てて考え事を始める。彼女は急に真面目な顔になると葉を籠の越しに眺め始めた。俺はあまり気にしないけど他の魔導師なら注意されてもおかしく無いぞ？

魔導師にとって自分の技術というのは人生そのものだ、恐らく魔法学校でも教えるのは基本的なこと、つまりはマナの出し方や基本的な薬物の知識などくらいだろう。それ以上の専門的な話となると本格的に弟子入りするしかない。

「あ、あのっ！」

考え事が終わったのか彼女は俺の方を向いて声をかけてきた。そんなに大声で言わなくても聞こえるのに、わざわざ大声を出されると耳が痛い。

「弟子にしてください」

「断る」

俺が考える素振りもせずに一瞬で返答すると彼女の目は涙を溜め始める。いや、コレくらいで泣いてたら後々きついぞ？俺なんて師匠に弟子入りを申し込んだら笑顔で死んで人生やり直せって言われたから。

なんであの人はあんなに楽しそうに俺の事を苛めてくるのだろう

か。でも何でそう言ったのかは理解できる。魔法なんかに興味を持つてしまったのがいけないのだ。

魔法の道に入るといふのは生半可な覚悟では通用しない、自分の一生を捨てるようなものなのだ。しかもそれでいて極めることなどどんな天才にも不可能な事という絶対的な難易度も存在する。

『錬金術、魔法と言い換えても良いが。これを極めるのには私があると100人がいて一万年かけたとしても無理だろうさ』

自信家でそれに見合う實力を持ち、天才という称号を持つ師匠が真面目な顔をして俺に語った。恐らくはあれは師匠なりに見つけた答えなのだろう。

『自分では不可能だ』と師匠ではありえないような答えが、だ。

一般的に言えば不毛で非生産的で意味の無い事が魔法の探求、そしてその探求に全てを捧げる錬金術師という職業はそれほどまでに無駄なのかもしれない。

俺はそのまま一言も発することも無くその場を後にしてテントに戻った。明日にはグレンさんが来て葉を運び込むのを手伝ってくれるだろう。



神様は俺の事が嫌いなのか？ 泣かせてしまった女の子と同席させるなんてイジメに違いない。今度教会にお布施しておこう。それくらいの余裕ならある、しすぎたら塩のみでの生活になるけど。

「弟子入りの件だったら断るよ」

「あう」

俺としてはこんな人の多いところでそういう話はしないで欲しいんだけどね、どこに耳や目があるか分からないんだから。まあこれだけ騒がしいと大声で会話しないうりとなり話ですら聞き取れないんだけど。

ちなみに俺の事を知っているのはこの商店街の人間のほかにも常連の冒険者くらいだ。しかし彼らは俺の事を外部に漏らしたりしない、なぜなら彼らが必要としているのは俺の作る道具、つまりはマジックパウダーなどのため、俺の機嫌を損ねるような事は出来ないのだ。損ねてしまえば俺から道具を買うことは出来なくなってしまう。俺から道具を買うにはその冒険者から紹介されなくてはならない。

つまりは俺の事を外部に漏らさないような信頼が必要なのだ。商売をやるのに信頼は欠かせませんぜ。

「じゃ、じゃあ売って欲しい道具が」

「んー、モノによるかな」

余りに高レベルなもの、例えばユニコーンの杖や万能薬といった希少価値が高いものや、グレートエーテルといった材料は簡単でも高度な技術が使われるものは無理だ。

ユニコーンの杖というのはユニコーンという聖獣とまで言われる動物の角を利用したもので、たとえ魔法を使うことが出来ない人で

もその杖を一振りすれば傷を癒すことが出来るプリーストも涙目の代物だ。

万能薬はあらゆる病に効くといわれるもので、ドラゴンの爪とこの大陸で一番高い山のスレッド火山の頂上で一年に一回咲くというスレッドの花の花びらが必要になる。

どちらも今では伝説級のモノだ。作ってくれと言われるような事は無いと思う。

「その、杖なんですが」

「杖だったらグレンさんって鍛冶屋に行きな。丁度良いのを仕立ててくれるよ」

結構華奢に見えるんだけどこう見えて杖で撲殺するような魔導師なのだろうか彼女は。ああ魔導師じゃなくて魔導師見習いか。まだ学校にすら入っていないんだし。

杖なんて使った覚えが無い。そもそも現代の杖なんて飾りだし。

「その、魔力特性付きの杖が欲しいんです」

「現在失われた技術です」

魔力特性というのはマナを効率的に使用する事の出来る特性の事を言う。ちよつと違うがマジックパウダーもその一つだ。あれは作成者のマナを使って持っているマナよりも多めに消費することにより普通に魔法を唱えるよりも魔法の威力が増す。

魔力特性付きの杖というのはその効果を断続的、かつ半永久的に受けられるようにする技術のことだ。古代文明の遺跡で極稀に発掘されることもあるらしいが高値で取引され、その技術は未だ研究中有る。

まあ例外もいるけど。

「そ、そうなんですか？」

「知らなかったのか」

「はい」

どうして誤解してしまったのかは分からないが、彼女は残念そうにしよんぼりしている。

「で、でも使ってる人を見ましたっ」

「へーどんな人？」

「女性で、杖を振り回しながら魔法を唱えて私の住んでいる町を救ってくれたんですっ！ 名前は聞けなかったんですけど『私は天才だからな！』って口癖の様に言っていました……どうしたんですか？ 机に肘を突いて項垂れてしまっつて」

「それは……」

それは俺の師匠だーっ！

何やってるのあの人！？ 俺のいる時にやった覚えが無いから多分この一年でやった事だろう。あの人自分の立場が分かっているのか！？ 色んな国で無銭飲食暴行泥棒公務執行妨害過剰防衛等々で指名手配くらってるっていうのに目立つなよっ！

まあ俺がそんな事言っても「天才だから許される」とか言うんだろっつな、真顔で。

そして俺の師匠が例外の一人で、本来研究対象であるはずの杖を使って悪行の限りを尽くし、各国で法律を犯しながら暴れまわっている人である。あの人は技術の発展というのに興味が無いのだろうか？ あの人が研究用の白衣を着ていたのは俺にモノを教える時だけだった気がする。

「私がどうしてそんなに強いのか聞いたら『天才だから』って言葉

の後に『この杖の性能もある』って教えてくれたんです。だから首都に行けば売ってるのかなって」

なるほどあの人が原因か。

「『だが私の才能が一番の理由だな』とも言っていました、だから私も……」

「そのセリフは忘れなさい」

きつとあの人の才能は誰にも真似できないようなものだから。

錬金術師でありながらソーサラー以上の魔法、ウィザード以上のゴーレム操作、ブリースト以上の蘇生魔法等々あの人は人間じゃない、化け物だ。俺はそう認識することにより今まで精神の平穩を保ってきたのだから。

あの才能の塊みたいな人を目標にするなて人生を無駄にするのと意味的には同じだ。

「君が目指すのは何？ その人みたいに（見た目は）ソーサラー？」

「わ、私は錬金術師ですつ。それで皆を助けてあげたい、薬を作りたいんですつ！」

「薬を作りたいなら薬師になれば良い、そっちのほうが簡単だよ」

錬金術にはマナという概念が入ってくる、ちよつとミスをするだけで効能が変わってしまうことだってありえるのだ。ならばマナが必要無い薬師であれば危険性が一つ減ることに繋がる。

「錬金術師ってのは言い換えれば研究者だ、金はドンドン減るのに全然入ってこない」

0と1の概念を研究することが錬金術師の本懐。

モノは0から生まれ1になりそして0になる、ならば0に至れることが出来れば全てを知ることが出来るのではないか、それが錬金術師の本当の研究対象だ。モノの原点、混沌、カオスとも言われるそれに近付くこと。天才ですらも諦めた究極。

そして錬金術師が忌避される一つの理由、滅びた古代文明の理由。それは錬金術師が0に近付きすぎてしまったがために全てが0になったのではないかという説。今となっては眉唾となってしまうこの説、古来までは信じられてきたものだ。

しかし俺は何となく思っている、その説が本当なんじゃないかと。そう考える俺だからこそ、彼女に言う言葉はもう俺の中で決まっている。本音と建前は違うけれど、言う言葉は師匠と全く同じ。

「死<sup>0</sup>んでからやり直<sup>1</sup>せ」

もしかしたら俺は最悪の人間だろう、なんせこんな言葉をこんなに笑顔で言っているのだから。

彼女がこの言葉の意味に気が付けるのかは知らないが、気付けた時彼女は俺に何と言うのだろうか。

俺は食事をさっさと済ませるとその店から退散する事にした。

#### 4 (後書き)

マジックパウダーは不思議な白い粉ではありませんが、あまり体内に摂取しないようにしてください。

無事に納品が確認され俺の元にお金が届けられた。今の俺の財布はこれまでに無いほどに潤っている。どれくらいかというところ。

「買ってしまった、新機材」

俺の工房の真ん中にドデンと置かれているのはただのどっかい鍋ではないので間違えないように。これは魔法の伝導性を考え、素材にこだわり、スレツフド火山の岩に含まれる鉄を使用して作られたものなのだっ！ 月収二カ月分相当也。

「たまらない、この黒々とした光沢がたまらない、たまらないったらたまらない」

まさかこんなものが入荷しているとは思わなかった。どうしてこうも今の俺はつきについているのだろうか、これ以上の幸せなど無い。

見るこの丸っこい形を、まさに職人が作った芸術じゃないか。こんなものが置いてある俺の工房はまさに楽園エデンに違いない。

「おっと俺としたことが、手袋をするのを忘れていたよ」

サツとコレを買うついでに買ってきたシルクの布を使って指紋のついてしまった表面を優しく撫でていく。

そして新たに輝きを取り戻す鍋、いや鍋だなんて下賤な呼び方はダメだ。これはそんじょそこらに置いてあるような代物ではない、もっと高貴な、そうそれこそどこぞの貴族令嬢のようなものなのだ。それを『鍋』などという名詞で表現するなど万死に値する。これは

固有名詞をつけなくてはならないだろう。そう、この子だけの特別な名前を。

「そうだ、キャシーにしよう、君の名前はキャシーだ。分かったかいキャシー、ああ可愛いよキャシーっ！」

しかし俺の幸せな時間はそう長くは続かなかった。俺の視界の端に何か黒いものが映る。もちろんそれは油虫ではない、もっと大きな、そう人間ほどの物体が。

「し、失礼しましたっ！」

「待て、待ってくれ、待って下さいお願いしますっ！」

「……」

「……」

無言が俺の工房を支配する。いつもなら居心地の良い空間も今では修羅場同然の空気の痛さだ。もし浮気をしたらこの空気を味わうことになるんら俺は浮気などすることは無いだろう。それくらいにこの空気は痛い、そして目の前の少女の少し顰められた視線も痛い、突き刺さる視線とはこの事だ。

俺はもう二度と出来ないような綺麗な土下座を披露することになった。

そういえばこの黒髪の子とは何度も顔を合わせているが名前すら知らないな。まあ話すたびに俺が突き放しているんだからしょうがない事なのだが。

しかし今このタイミングで今までの行動が全て裏目に出てしまった。

どうしよう、このままいけばさっきの行動が商店街中どころかこ

の町全体に広がってしまう、そうやってしまえばこの国に俺の住む場所なんて存在しなくなってしまうじゃないかっ！

そして俺は国境を越えて隣国に移っていく事になる、しかしそこでも俺の平穩は続かない、きつと噂が人の歩く早さで広がりながら尾ひれ胸鰭ついでに背びれまでついていくに違いないんだ、そして俺はこの世界に住んでいる事が出来なくなりそして0になるしかなくなって。

「やった、師匠より先に0に到達できるぞ。ふふふふ」

「あ、あのう」

「なんでしょうお嬢様」

流石にそんな未来は嫌なので何としても回避したい。せめて師匠よりは後に逝きたい、出来るか知らないけど。あの人、人間じゃなくて化け物だし。

恐らくあの人の体は時間が止まってるに違いない。

「で、弟子になれないのは分かりました」

おや、諦めちゃうのか。この美少女が弟子にならないのはちょっとどころじゃなく残念なんだけどしょうがない。

あの言葉はちょっととしたテストみたいだなモノなんだよね、あの言葉に対する自分なりの答えさえ見つけられれば僕としても弟子にとるのはやぶさかではない。

答えの無い問題ほど時間の掛かるものは無いし、あれを問いかけと理解するのも一苦労だ。というか俺は理解してなかったし。ムカついたから突っかかって行っただけだったし。

「ですので私を雇ってくださいっ！」

「……へ？」

「私をここで働かせてくださいっ！」

理解できなかったら言い直された。いや、別に意味が分からなかったわけじゃないからね。

弟子になれ無いなら働かせてもらうつてことですか？ いや、でも一人で十分に回せてるし、この間みたいな依頼はちよつと忙しかつたけどそうそう有るものでも無いし。

そもそも収入的な問題で人を雇うなんて事出来るわけが……。

「お給料は要りません、私をここにおいてくださいっ！」

ああこれはアレか、どうにかして俺から技術を盗もうとしているのか。俺もちよつと位なら基礎を教えてもいいんだけど、半端な知識を身につけたら逆に学校で苦労することになる。

それに俺の持っている技術というのは俺の技術じゃない。正確には『俺だけ』の技術じゃない、師匠が、そしてそのまた師匠が自身の人生をかけて研究に研究を重ねて積み上げていった血と汗とその他イロイロな液体の集大成なのだ。そう簡単に盗ませるわけにも行かない。まあ簡単に盗める技術でも無いけど。それでも教えるなら正式な弟子が良い。

彼女の前ではそういうのを見せないようにするか、出来ないことは無いだろうけど魔法学校の日程ってまだ分からないからなあ。どうした事だろう。

「こうしよう、君が学校に入って最初の試験で十番代に入ることが出来たなら雇うことにする。もちろん一桁であっても大丈夫だ」

今回入学する魔導師見習い未満は100人以上、その中には貴族で抱えの魔導師から指導を受けたもの、それに魔導師の子もいる。彼らは学校の箔付けの為に呼ばれたに過ぎないが勉学には少しも手

を抜かないであろう。そのなかで上位になるには才能だけではなく、努力しなければ到底無理だ。

もし成績をキープできるような努力家であれば彼女を正式な弟子として迎え入れることにしよう。もしかしたらその頃には彼女は錬金術師以外を夢見るかもしれないがその時はその時だ。

「は、はいっ！　ありがとうございますっ！」

「よし、良い返事だ。それじゃあそろそろ名前を覚えてくれるかな、さすがに君のままじゃ嫌だろ？」

彼女は嬉しそうに笑顔で返事をする。それがどんなに難しい事か理解せずに。

なんだか俺って師匠に毒されてきているんだろっか、彼女をぬか喜びさせてそれを見て楽しんでるなんて。

「ミリアリム・フォン・アヴェンティです。これからよろしくお願ひしますっ！」

「ああよろしく」

……………フォン？

## 5 (後書き)

約束をする時にはちゃんと相手の事を理解してからしよう

フォンという言葉の意味することというのはその人物が貴族の生まれであることを意味する。そして現在も貴族の家系にいることだ。

つまりどういう事を言いたいかというと。

「見てくださいクリスマスさんっ！ 私学年で一番になりましたよ!？」

彼女、ミリアリム・フォン・アヴェンティは貴族のご息女で、英才教育を今まで受けてきたという事だ。

しかもたちが悪い事に、このアヴェンティ家というのは代々軍人の家系で、このオストリアで軍部を司っていることだろう。貴族のような華々しい生活ではなく、慎ましく、そして現場本位な教育のおかげでこの子はその背格好からは想像も出来ないが武術にも精通しているらしい。

さらに家の方針とやらでこの学校にいる間には実家からの援助は殆ど無く、あつたとしても必要な資金提供のみなのだという。

なんでこんな令嬢が師匠と接触を持ったのだろうか聞いてみると。

「前に私の住む町が魔物の集団に襲われた時、あの方が助けてくださったんです。あの時は父は遠征に出かけていたので軍の主力部隊はいませんでした。もしあのままの方が来てくださらなくては町は全滅していたことでしょう」

という話が返ってきた。どうやら今回はあの人の突飛な行動が正しい方向に動いたようなので良かった。悪い方に転がった場合には辺り一帯が焼け野原になりましたとかなりありえるから。

さて、認めたくないものだがどうやら俺はこの子を雇わなくては

ならないようだ。信用第一、一度約束したら断固厳守、一度でも約束を破れば信頼なんて簡単に失われるものです。

学校の日程を聞いてみると一週間のうち五日が講義、残り二日が自由学習だという。自由学習というのは文字通り自由な学習の時間であり遊ぶ時間ではない。一週間の初めの日に成果を先生へと報告しなければならぬのだとか。

始めのうちから自力で研究しなければならぬとかきついモノのようだが、実際に自立してみると殆どが手探り状態、新しい事を学ぶには失敗の連続、未だ魔法というのは研究段階な技術なので失敗が当たり前なのだ。だからこそ最初から失敗を経験させ、その中から次に続く技術を学び取らせようと考えているのかもしれない。

「さて、それじゃあ雇用条件について突き詰めていこうか」

「はいっ！」

「まず週何日これるかな？」

そんな感じで突き詰めていったところ次のように纏まった。

1. 週二日の自由学習の使いこで働かせてもらう。
2. 残りの五日のうち授業が早めに切りあがった日に限り店番をする。
3. 給料は一時間毎に計算する。

雇用に関する法律なんて存在しないし、基準なんてものも無いのだから適当に決めてみた。給料は月一回の支払いで合計時間から計算する。

つまり今日45分働いて、翌日85分働けば合計2時間働いた事になるという事だ。合計3時間36分のようになった場合には36分は切り上げることにする。

給料は低めに設定してある。理由としては彼女はここに働きに來ているだけでなく、技術も盗みに來ている為だ。決してうちの店の収入が少ないからではない、絶対に違うから間違えないように。

「こんなところでいいかな？」

「はいっ！今日は本当にありがとうございました、これからよろしく願いますっ！」

おお、気持ちの良い返事だ。とっても良い子なのはわかるのだが、この子もあの俺の師匠に毒されているのだろうか？絶対に会わせない様にしよう、この子という癒しがアレに汚されるなど考えたくも無い。

「それじゃあ今日は時間ある？あるなら商品に付いて説明しようと思うんだけど」

「大丈夫です」

という訳で俺の店の中を案内する。そういえばこうして誰かを雇うのは初めてのことなんだけど大丈夫かな、ちよつと今更だけど心配になつてきた。

「これがマジックパウダー、在庫が少くないから明日辺り採取してくるけど付いてくる？」

「はいっ！」

一番の売れ筋がまさかの品薄状態、これじゃあいつもの冒険者たちが來た時にまずいので早めに補充しなくてはならない。しかしまだ彼女を店に一人にしておくわけにもいかないので今回は店を休みにすることにしよう。

ほかにも売れ筋だったり、全く売れないものだったりの紹介やら

値段やらを教えていく。今度紙に書いて渡すことにしようか、ついでにいくつかの注意事項も書いておかないと。俺の店を周りに広めないようにとか。

「あの、これはなんですか？」

「ん？ ああそれは毒だよ、魔物狩りの時とかに使うのさ。食べられなくなるから狩猟には余り向かないね。毒消しを振りかけて天日干しすれば大丈夫だけど、それなら最初から罾で捕まえたほうが早いし安全だから」

商品に関する予備知識は有れば有るだけ便利だ。利用者間違った商品を買らなくて済むし、相手の物欲に付け入ることも出来る。どんなお客にでも満足して帰ってもらうことが一番信頼を得られる。

「おっと、それに触らないようにね。そのビンの中身は貴重なものだから」

「そうなんですか？」

「それ一つで一家が一年は生活に困らないくらいの価値はある」「へー」

ハチミツという甘味だ。しかも『ハウエル蜂のハチミツ』という極上の代物。貴族が愛してやまないモノのだが、同質量の金と交換されるほど高価なのだ。

森の奥深くに生息し、その森の生態系の頂点に立つハウエル蜂は一匹しか女王蜂が確認されていない。有力な説としては女王蜂は一世代につき一匹しか選ばれず、他の候補は全員殺されるのだとか。

その殺される女王蜂候補を確保できないかと画策した人もいるらしいが、全て失敗に終わっている。ハウエル蜂は凶暴で毒を持ち、その上知性もあるのではと言われている。ハチミツをとるなんて普通の方法では取れないのだ。

「それじゃあどうやって取るんですか？」

「運良く古巣を見付けられるか、それともハウエル蜂の蜜蜂を見つけて解体するしかないな」

ハチミツの味というのはどの花からミツをとるかによって変わってくる。ハウエル蜂がどの花からミツをとっているのかは知らないが、迷い込んできた蜜蜂を捕まえて解体すればハチミツが手に入るという事だ。

古巣の場合には女王の交代の時期を見計らわなくてはならず、素人には難しい。地元の村にはそれ専門の猟師がいるのでその人に頼むのが無難だろう。

「その村に行ったときに猟師さんと話したことがあるんだが、なんでもハウエル蜂とはある種の契約をしているらしくてな、蜂に手を出さない代わりに古巣のミツは分けてもらえる事になってるんだとさ」

「ええ！？　という事はハウエル蜂には知性が存在するってことですか！？」

「俺は実際に合った事は無いから何とも言えない」

もしそれが本当ならば大発見だろう。しかし確かめる術は無い。もしあの村の十人以外がハウエル蜂に近付けばすぐにも殺されてしまうのが落ちだろうから。

師匠はこの時ハチミツ欲しさに森に特攻しようとして俺は生きた心地がしなかった。もしあのまま師匠を行かせていたら俺まで巻き添えを食らって蜂の餌食になっていただろう。

時々自分の失敗談やら経験話をまぜながら話していると学校の門限になったらしく彼女は慌てて帰っていった。

これからどうなっていくのかは少しだけ不安だが、でも今日みたいに誰かと賑やかに話しながら一日を過ごすというのもまた良いのかも知れない。

ただし師匠と過ごすのは勘弁してもらいたい。あの人と話すと落ち着くとかそういう問題じゃなくて俺の精神が削れて、俺が一秒ごとに寿命を知縮め、ストレスによって胃がキリキリとしてくるのだから。

「最近どーなのよクリス、なんか女の子雇ったんだって？」

「なんすかイキナリ脈絡も無くグレンさん」

「まじかよ、クリス。お前より先になら結婚できると思ってたのによー」

「いや、結婚して無いから。雇っただけだから。耳ついてるのか？その耳飾りか？」

「おいおい、お得意様にその言い方は無いだろ」

「黙れ、失礼なヤツにはこれで十分だ」

「まあまあクリスさんも落ち着いて」

「そうだぜクリス、落ち着けよ」

「うるせー。あ、それ上がり」

「なぬっ!?!」

夜も段々と深まり始めた頃の酒場にて蝋燭の光を頼りに俺はたまたま揃っていた面子を誘ってゲームをしていた。

四人でテーブルを囲んでいるメンバーは対面に鍛冶屋のグレンさん、左に冒険者で俺のお得意様（自称）のサニー（男）、右にはその冒険者仲間であるマリアさんだ。全員俺が何を売っているのか知っている面子であるので注意せずに話せるので気がらくだ。

「ほらよ、今日は俺の一人負けだ」

「今日『は』？ 今日『も』の間違いだろうがサニー。金置いてけ」  
「次の冒険が当たりだったら全部纏めて払ってやるよっ!」

そう言っただけ俺の懐が暖かくなった事はもちろん無い。冒険者といふのは簡単に言えば何でも屋だが、極稀に古代遺跡の発掘なんかもやっていたりする。

もちろん近場だったり大きな遺跡だともう発掘が終っているので遠出するしかないのだが、何の手がかりも無しに宝探しなんぞしても見付かるはずもなく、サニーはいつでも文無しであった。

マリアさんは冒険者というよりも何でも屋寄りなので引越しの手伝いから商隊の護衛まで、確実に利益になるようなお仕事ばかりしているらしい。確実にサニーよりもお金を持っている。

この二人幼馴染で、二人揃って冒険者になったのだが、どうにもサニーの突撃癖というか無謀なところが治らずチームは解散してしまつたらしい。今ではたまたまにマリアさんがサニーに雇われて格安で力を貸すくらいの仲だとか。

今回のゲーム成績は4位サニー 3位グレンさん 2位俺 1位マリアさんとなっている。俺もそれなりに頭には自信があるのだが、どうにもマリアさんには勝てる気がしない。なんだろうか、神様に好かれてでもいるのだろうか。

しょうがないのでこの飯代は俺が立て替えておくことにする。グレンさんには流石に払わせるわけにはいかない。賭け事禁止中で無理言つて参加してもらつたからだ。アンナさん、まじこわいっす。

「それで実際のところはどうなんだよ。もう襲つたのか？」  
「それは無い」

貴族の令嬢に手を出すとか一般市民の私には到底出来ません、はい。

アヴェンティ家は確かに厳しい家ではあるが、決して放任主義でも子供を愛して無いわけでもない。昔令嬢と結婚した王族が一回理不尽な扱いをしたというだけで王家に剣を抜いたという逸話は未だに有名だ。その時の王様がそれを笑って許したらしいので家はその

まま残る事になり、アヴェンティ家はさらにその名を有名にしたのだとか。

下手したら俺の首が飛ぶぞ！？ 流石に雇っている子が貴族の令嬢なんだなんて簡単に広めて良い事でも無いので、ここで本音を言う訳にはいかないが。

「クリスさん」

「ん？ 何マリアさん」

「不順異性交遊はいけないと思いますよ？」

マリアさんは顔を赤らめながらそう言った。

おいちよつと待てマリアさん、あんた今幾つだよ。この程度の話で顔を赤らめるとか、どうなってるんだよおい。

「おい、サニー。何でマリアさんはこんなにも純粹なんだ」

「知らん。前からこういう話題は苦手そうだった」

「冒険者ってこういう話題をつまみにして酒をかつくらいながら腹搔いて寝てるイメージがあるんだが」

「否定はしないがマリアは一応女だからな？ そういう話題の時にはいつも席を立てて早くから寝てた覚えがある」

例外はいつでもでもあるんだな！。俺の師匠なんてそういう話題大好きだったんだが。酒飲んで腹出してイビキかきながら寝るのは師匠のイメージ。真顔で男よりも女が好きだと言いながら女子風呂に入っていた後出てきた時のやりきったような清々しいほどの笑顔は忘れられない。

この人に師匠は会わせられないな。きつと会った翌日は同じ部屋から出てきて一日使い物になら無くなる。あ、襲うわけじゃないよ？ からかって遊ぶだけ。

「じゃあ、もう少しだけ話を続けてみるか」

そしてその弟子である俺も最近になって人をからかうことの喜びというかそういうものを覚えてきた年頃でありまして、さあてどうやってマリアさんを真っ赤にしてやるのかなあとか悩んでみたり。

「へ、部屋に帰りますっ！」

さてこれからというところでマリアさんは部屋に帰ってしまった。残念。

こういった酒場には宿が併設されていることが多い、マリアさんはどうやら今日はここに泊まるらしい。

「あんまりからかってやるなよ？ あれでも頑張ってるんだから」「分かったよ。それじゃあ今日はこの辺で帰るとしますかね」

外を見るともう真っ暗だ。家の明かりも消えているので月明かりを頼りに帰るしかない。

グレンさんも帰るようなので送っていくことにする。ちょっと酒を飲んでいるので足元が心配だからだ。サニーも今日はここに泊まるらしい。とりあえず「一緒の部屋か？」と冗談半分に聞いてみると俺をバカにするような目で見てきた。

「おおクリス、まだいたのか、丁度良かった」

帰ろうとしたところで話しかけられる。この酒場の店長で、知り合いだ。俺の事も知っていて、たまに注文なんかしてくれる人。

「蝋燭が無くなりそうなんで、いつも通り売ってくれとありがた

いんだ」

「分かりました、任せてください」

蠟燭か、確か在庫は結構あったな。でもそろそろ心許無いし、材料をとりに行くとするか。

森の中というのは気持ちの良いものだ。

人の出す雑多な物音や話し声は聞こえてこないし、空気が澄んで  
いる。風も心地よく感じることもできる。大通りから外れた少し奥  
まったところに店舗を構えているということも要因の一つなのだろ  
うが、やはり錬金術師にとってはこういった場所は第二の故郷のよ  
うな所だ。

研究用の材料はそこかしこに落ちているし、邪魔になるようなも  
のは何もない。火事や食料の心配がなければこういう森の中に家を  
建てたいものだ。

実際に俺の師匠は俺が弟子になってから山の中に小屋を建ててそ  
の中で数年過ごしていたこともある。

何回かボヤ騒ぎを起こした事もあったがそこは自称天才様がどう  
にかした。やはり森の中に住居を構えるとなるとそれなりに危険が  
伴うものなんだ。食料は週に一回俺に街まで買いに行かせていたし。  
師匠にはお得意様としか呼ばれない客が何人が付いていた。その  
人たちは目玉が飛び出るくらいの金額をポンツと出していたし、こ  
ちらについて詮索してくることもなかった。きっと俺が名前や職業  
を知ってはいけない人種に違いない。

「店長さん、今回はエビルの葉だけですか？」

「いや、もう一つ用事が出来たんだ。そっちは俺が何とかするから  
君はエビルの葉を採ってきてくれ。どれかは分かるか？」

「はいっ！」

今回からは彼女、ミリーが付いてくることになっている。最初は  
俺のことを師匠や先生と呼ぼうとしていたのだが俺は正式に彼女の

ことを弟子にとつた訳ではないので店長と呼ばせることにした。

最初はクリスで良いよと言っていたのだがそういつた上下関係はキチンとしないといけないという彼女の言い分によってこのような形になってしまった。貴族令嬢なのだから俺より身分は上だろうに。

さて、エビルの葉の採取は彼女に任せることにして俺もロウソク  
の材料を集めるとしますかね。

ロウソクの材料といっても実は二種類存在する。一つは一般的に知られている蜜蝋から作ることでできるロウソク。修道院などで養蜂が栄えているのでそこそこ安値で手に入れることができるのだが、どうにも近年八チの育ちが悪いらしく値上がりしているらしい。

そこでもう一つの作成法が必要になってくる。この技術、実は俺が発見したもので、師匠にも教えておらず、さらにこの街では俺以外に作り手がいない。俺の独占市場なのだ。ただし交友が狭いのでそこまで儲かっていないけど。

必要になる材料はもちろん蜜蝋ではない、俺の使うものはある種  
の木の果実だ。果実に蓄えられている融点が高い脂肪を抽出してそれを固めることによりロウソクを作り出すことができる。

「あつた、ルース」

このルースという木から取れる果実が今の所一番の使い易さを誇っている。この果実からその脂肪を抽出できればロウソクができるというわけだ。しかしいくら高融点といってもロウソクの元となるのだから火にかけて他の低融点の物質と分けることはできない。

そこで別の分離法が必要になってくる。それが压榨という方法だ。上から重石を乗せることにより中にある脂肪を無理矢理絞り出すという方法。

俺は無事にルースの実を採取し、そのままミリーのいる方向に歩いて向かう。ここらには凶暴な動物は住んでいないし、危険はないだろうが一応彼女は女の子だ、ずっと放置しておくわけにもいかならう。

「ってあれ？」

無事にミリーを発見したのだが、アイツ採取用に持ってきていたカゴを下に置いてなにやら森の奥の方を見ている。しかも少し緊張したような面持ちでだ。

「どうしたんだ？」

「っ！ て、店長ですか」

ミリーは突然隣に座り込んだ俺に驚きながらも悲鳴をどうにか飲み込み、指を前方に向ける。そちらは彼女が先ほどまで眺めていた方向で、森が広がっている。

しかしその中に一匹、ここではあまり見かけない生き物が紛れ込んでいた。

「おお、運が良いな。あれはハウエル蜂だな」

そこにいたのはハウエル蜂であった。どうやら花を探して居る時にでもここまで降りてきてしまったのだろう。極稀にこういう事があったりして森に食料を探しに着ていた人が襲われることがあるのだ。

「ラッキーだな。どれくらい蜜を抱えているかわからないが、儲けものだ」

ハウエル蜂のハチミツは高値で取引される。しかも普通の蜂は巣の中で花粉をハチミツに変化させるのに対し、ハウエル蜂は一度体内に取り込んで腹の中で花粉を変化させる。この体質にはイロイロな説があるが、はっきりとした理由は分かっていない。恐らく、ハウエル蜂のとる花粉が遠方にあり、そこまで行く途中で蜂が死なないようにするためのモノではないというのが今の所有力な説だ。

「で、でも危険が迫ると仲間を呼ぶって」

「そうだ、しかし音を出すのは頭の牙同士をぶつかり合わせる事によつてだ。だつたら」

女の子の前で失敗するのは嫌なのでマジックパウダーを懐から取り出す。これには魔力を知覚させるという効果の他に込められている魔力によつて地力以上の魔力を使うことができる。

ひと掴み分のマジックパウダーを空中にばら蒔き、そこに魔力を繋ぎ合わせる。

「一発で頭を吹き飛ばせば良い」

イメージするのは風の刃。マジックパウダーが繋ぎ合わさり、一本の刃となる。指を立てそれを目標に向かって振り上げる。

「疾く 切り裂け 風の刃」

チツという風の切れる音。

風の刃はハウエル蜂に向かっていきその体を両断する。頭と胴体の付け根部分を正確に通り返け、羽が止まり、そして胴体と頭部は二つに別れて重力に引き寄せられるかのように落ちていく。

風は蜂の体を通り抜けるとまるで最初から何もなかったかのように霧散する。目標以外に傷付けることはなく。

「まあまあの出来かな」

嘘です。自分的には満点をあげたいくらいの完璧具合でした。でも女の子の前だからちよつとはカツコつけたいんです。

「す、凄い」

ほら、こんなキラキラとした尊敬の眼差しを俺は受けたかったんだよ。決してバカにしたような笑みでも、小憎らしい説教でも、ムカツクドヤ顔で俺よりも凄い魔法を一瞬で行使する奴でもない。全て師匠のことだけだ。

「それじゃ、今日は店に戻るか。明日からマジックパウダーの生成を始めるぞ」

「はいっ！」

ヤバイ、この子ってすごく素直な良い子だ。このままこんな俺の近くに居ていいのだろうか？ と結構本気で考えた。

## 8 (後書き)

蜜蝋 〓 洋ろうそく

木蝋 〓 和ろうそく

偉そうなこと書いてるけど実は二つとも現実の蝋燭です。オリジナ  
ルではありません。

朝、もう一般的な店は本格的に回転の準備を始めているかすでに開店している時間帯に男が一人少し大通りから外れた道を歩いていた。

他の裏路地のように薄汚いわけではないが、表よりも暗く、ゴミが落ちている路地を歩く一人の男。彼は目指す店に一直線に向かっていく。

目的の店に辿り着き、ドアを細かく二回叩く。しかし中から反応は返ってこない。しょうがないので男はもう一度、さっきよりも強めにドアを叩く。だがやはり中からは返事がこなかった。

男は諦めたようにため息を吐き、ドアから離れていく。

次に聞こえたのはまるで木の板が碎けるような音だった。

「おわっ!?!」

なんだ!?! なんか店の方からまるでドアが無理矢理蹴り飛ばされて外れて碎けたような音が聞こえてきたんだが。

まずい、昨日使った機材の置き方が甘くて落ちて割れてか? そうなるとまた採取にいかなくてはならないんだけど。ああ面倒だ。

急いで近くにかけておいた衣服を身に付けて店舗の方に駆けていく。そこで見たものは。

「よう、ねぼすけ店主。勝手に上がらせてもらってるぜ?」

黒い服に身を包んだ一人の男であった。別にこの服を着ているの

は彼が痛々しい趣味を持っているという訳ではないのでご開始内で  
もらいたい。

「死ね」

しかし俺にとってはこいつは客とかそういう問題じゃなく嫌いな  
のだ。苦手と言ひ換えたほうが良いのかもしれないが嫌いなのだ。  
そこに異論は認めない。

「んだとゴラアツ！」

「うつせえぞ不良執事っ！ 近所迷惑だ、ドアを直してさっさとこ  
こから出ていきやがれ！」

「あゝん？ てめえが呼び出したから来てやったんだろっが、  
店をちやつちやと開けねえお前が悪い」

「うつせえ！ 俺が呼んだのはお前じゃなくてお前んとこの嬢ちゃ  
んだ」

「お嬢”様”だボケ、言葉使いに気を付けるカスがつ！」

「良い度胸だ、今ここで決着を付けてやるから表出るや」

「はっ、ほざけ。錬金術なんて軟弱なもんやつてるてめえに誰が負  
けるかつ。手加減してやるから精々死ぬんじゃねえぞ」

「ああ？」

「おお？」

こちとら日々野山駆け回って素材集めてんだぞ、舐めきってる  
こいつを叩き潰してやる磨り潰してやる。

「黙れアウル、何時まで私を待たせれば気が済むのだ」

さてこれから殴り合いだ なんて爽やかな空気を醸し出している  
とこの執事服の男、アウルの後ろからまだ年若い女性の声が聞こえ

てきた。そしてそれに続いて感じる威圧感、まるで全ての王であるかのような威圧感だ。

それを纏っている人物は俺の中ではまだ数人しか知らない。本気の時の師匠、この国の王、そしてこの男の後ろに居る少女だ。

「お嬢様、失礼しました」

「良い、だが次からは気を付ける」

現公爵家家長にして、最年少騎士の称号、さらに文官としても超一流の頭脳を持つという才能の塊。この国の王ですらその才能に気圧される時があるまだ20にもならない少女。

「久しいな店主、こたびの招き嬉しく思う」

「はい、再びお会いできて光栄ですエプシュタイン公爵様」

ちなみにこの少女の立場はもちろん我らがミリーちゃんよりも上である。父と母を早くに亡くしたために家を継がなくてはならなくなったこの子は人一倍苦労してきたが、その溢れんばかりの才能に支えられ、今ではこの国を代表する貴族になっている。

最初の頃は女が公爵家を継ぐということに異論を唱える者が多く、どうにか結婚して家の家徳を上げようとするものが多かったようだが、彼女自身の努力と王の援助により今の所結婚はしていない。ちなみに年齢は14だ。多分貴族は変態ばかりなんだと思う。

「これが連絡させていただいたハウエル蜂のハチミツでございます」  
「おお、ありがたく頂戴しよう。近日お茶会が開かれるのでな、ちようど切れていてこれを探していたのだ」

この子との出会いは実は師匠も絡んでくる話になる。まあ迷惑をおかけした事からの繋がりであると言っておけばだいたい想像出来

るかもしれないが、師匠が彼女の収める街で騒ぎを起こし、その時に彼女が直接師匠を裁くことにした。

しかし師匠はそれを拒否し、一般兵ではアレに手出しが出来なかったために俺が代わりになんかして罪を償わなくてはならなかった。その時から俺と彼女は仲が良くなっていったわけで、今ではこうして貴重な品を見付ける度に彼女に紹介して気に入ってもらえば買い取って貰うことにしている。

「ところで店主よ」

しかし彼女には少し困ったところがあり、俺としてはあまり会いたくない理由となっている。

それは迷惑とかいう師匠のような理由ではなく、嬉しいのだが俺としてはどう答えてよいものかわからないからだ。つまり……

「私と婚約を結ぶ決意は出来たかね」

「こういうことなのだ。そして彼女がこの話題を持ち出すたびに彼女の後ろに控えている男が殺気立ってくる。

恐らく視線というものに質量があるならば俺は一瞬で穴あきチーズのようになっていいるだろう。」

「侯爵様、毎回申していますとおり私としましてはそのお話はどうにも了承するわけにはまいりません。私のような一市民などにそのようなことを」

「一般市民だと。あの方の弟子であり、本人も錬金術に関しては一流と聞く。我が家系は武や文に長けていても魔法に関しては未熟、ならばその血を我が家系に取り入れたいと考えている。たしかにまだまだ発展途上の技術ではあるが、そこは我が家で補助しようではないか」

彼女の言っていることは大変魅力的な話なのだが、どうにも貴族のようなかたっ苦しい生活に身を埋めるといっなのは嫌だ。そしてこのアウルに毎日見張られているような生活はもっと嫌だ。

「残念だ、アウルも店主が来てくれれば仲の良い者が増えて喜ぶであろつに」

『仲良くありませんので』

しかしどうやら彼女の目は別次元の映像が見えているようだ。今度良い医者を探して紹介してあげなくてはならないだろう。目と脳を見てもらわなくては。

エプシュタイン女侯爵様には丁寧に誤解を解かさせていただいた後普通の商談に入ることができた。

それにしてもあの方はいつになつたらあの摩訶不思議な誤解を解いてくださるのだろうか、毎回毎回あいつと仲が良いと言われる気持悪さとオサラバしたいところだ。

さて商談の方は無事に終了し、こちらとしては八チミツだけでなく貴重なものが高価で一般人には手を出せない厄介な品物を幾分か処理することができた。

特に食品関係に関しては侯爵様は特に目がないので飛ぶように売れる。あれでゲテモノでも美味しければ良いという正確なのだから人は見た目では判断できない。あんな美少女が「好みはヤモリの姿焼きだ、あの苦味がたまらない」などと発言するとは誰が想像できよう。

そんな発言は公ではなく私で無ければもちろん聞けないが。普段は「海魚が好きだ、ワインも少々嗜む」と言つてらっしゃる。公私はきつちりと分けていらっしゃるのでこちらとしても接しやすい方ではある。普段であればジョークだつて通じるし、たまにあちらからなんの連絡もなしに現れたかと思えば。

『なんだ、未来の夫と一緒に居たいと思つてはいけないのか？』

などと言つてのけたりもする。少々心臓に悪いジョークがお好きなようです。

さて、あれから数日が過ぎミリーも大分慣れてきた頃。と言つてもやる事と言えば商品の整理と掃除ぐらいたが。貴族の令嬢に掃除をやらせるとか俺の首はそのうち物理的に飛ぶかもしれない。

でも客が来てもほとんどが顔なじみだから俺が相手をしなくちゃならないしなあ、ちよつとずつ顔を覚えられているけどまだまだ一人で接客はさせられない。紹介されてきた客を相手させるのもまずいしなあ。地道にやるしかないか。

「ミリー、倉庫の……」

「ちーっすっ！ お得意様が来てやったぜっ！」

そんな叫び声を上げながらノンビリとした空気を木っ端微塵に打ち砕き、ついでにドアまで吹き飛ばしながら入ってきたのは自称お得意様ことサニーであった。

俺の店のドアは立て付けが悪いわけでもないのだが何故かこうして壊される頻度が高いのはこのアホとどっかのバカ執事のせいだろう。

「わかった。ドアの修理代を置いて今すぐ帰ってくればお前の事をお得意様と認めようじゃないか」

「いやいや、冗談きついぜー」

「よし、まずは金を置け」

「じよ、冗談きつい」

「ついでに今までの負け分を置いてけ」

「冗談」

「それ以外の用事は認めない、さっさと帰れ」

「……」

なにやら落ち込んでいるので気持ち悪いからこれ以上いじめるのは止めておこつ。

男がそんなふうに着込んでいても可愛いとか可哀想とか欠片も思えないんだからさっさと帰って欲しい、俺の気分的に。

俺に呼ばれて来ていたミリーも入ってきたと勝手に男が情けなく

床に頂垂れているので一歩引いている。きもいよなー。

「ど、どうかしたんですか？」

しかし我等がミリーちゃんはこんなキモイ物体に対してもいつも通り優しく接してる。というか一歩引いたのも驚いただけだよ、知ってた知ってた。俺とは心の綺麗さ加減が違うんですね。

だがコレに天使のような優しさをかけてやる必要性なんて欠片もこの世界に存在していないのでさっさと用事を頼んでしまおう。

「ミリー、倉庫で在庫の確認を頼む。いつもよりも丁寧にな」

「あ、はいわかりました」

ミリーは店の奥に入っていった。

とりあえずこのキモイ物体をどうにかしなければならぬだろう。こいつがここに入ってきたという事は本当に重要な用事がある時だけだ、そしてその用事というのは彼の冒険者としての仕事に起因している。

こいつ自身は魔法使いではないので媒体等を買いに来たわけではない。

「おら、サニーさっさと用件を言え。うちの床を舐めに来たわけじゃないだろ」

「お前はもう少し優しさって物を身につけた方が良いと思うぞ」

優しさか。

優しさである師匠との特訓で生き残れるなら俺は優しさを持っていただろうなあ。あの人イキナリ魔法訓練の最中にたまたま捕まえたウサギを盾にしたりするんだもん。

それで少しでも気が散れば容赦なく嬉々として魔法で焼いてくる

し。

『勝てば正義、負ければ悪。お前は弱くて負けたから極悪人だ』

もつどうすれば良いのかわからなくなった。

ああ懐かしいなー、なんて考えているのも涙が流れてくるのでこころへんで止めておこう。

「クリス、今回は多分今までの付けの支払いなんて細かいことは言えなくなるぜ」

サニーはそう言って一冊の書物を取り出すとそれを俺に差し出してくる。

古ぼけた様子のないその本はどう見ても新品同然、これが今回の持ち込みらしい。

「古代遺跡から見つけた一品だ。こちらとしては高値で買い取ってもらいたい」

「……」

見た目は新品同然だが、これが古代遺産でないという証明にはならない。

今よりも魔法技術が進んでいたとされる古代文明は『保存』と称されている魔法を用いて新品のままあらゆるものを保存していたらしいことが今までの発見で分かっていたのだ。

だからその保存状態で判別することは難しい。むしろ遺産の方が新しい事もあるほどだ。

では改めて今回の依頼品を見てみよう。

書物でありながら傷んだ様子はなく日に焼かれた様子もない。夕

イトルは書かれておらず内容は不明だがこういった書物はそれだけで価値があり、たとえ料理について書かれたものであってもかなり高価なモノとなる。

高価なものだからこそ内容を見なくては判別は付かない。そこで交渉。

「中身を見ても？」

「3ページまでなら」

「心が狭いなあ」

「暗記されたら困るんだよ」

さすがにこんな短い間に暗記出来るほど俺の脳みそは高性能じゃないぞ。一日あれば暗唱できる自信はあるが。

言われたとおりペラペラと3ページまで流し読み。

「内容は日記か、ところどころに料理の記述が見られるな」

「マジでっ!?!? かぁー、ってことは買取不可？」

本当にただの料理本であれば買取はしないだろうが、これは別だ。ところどころに見られる料理についての記述、しかしそれは一定の法則によって成り立っている。同じ食材が幾度となく登場し、何日もその食材について書かれている。

この食材が好きなのだとしてもそう何日も食べるだろうか。

「ん？ これは」

ページの端っこに書かれているマークのような何か。そのマークに俺は見覚えがあった。

あれは一年以上前、俺がまだ師匠の下で修行と言うなの地獄を味わっていた頃の話だ。そのころに俺はこの紋様を見たことがある、

どこだ。どこで俺は見たんだ。

『街に降りるクリス』

『私に追いつけクリス』

『たどり着くんだ』

違う、こんな新しくない。

もっと昔、そのもっと昔。

『今は地獄でもいつか快樂に変わ（ry）』

『苦しいか？ ん？ 辛い？ ん？』

『起きろクリスっ！ 敵は待ってられないぞっ！』

思い出したくないのまで出てきた。ヤバイ、涙が。

『うつせえっ！』

夕暮れに染まる丘で俺は師匠と二人で立っていた。

何度も俺が弟子入りをせがみ、何度も同じ『死んでからやりなおせ』という言葉で追い返されていたあの時。

ついに俺はブチギレた。

『俺は死んでも何度だって同じことを言っつてやるっ！』

この子供のワガママな言葉に師匠は驚いたように俺の顔を見ていた。

その言葉の何に動かされたのか知らないが師匠は俺を弟子として迎え入れてくれた。そして俺にだけ見せてくれた『最初の魔法』。

それは……。

「この本は俺が買い取るよ」

「うえ！？マジでっ！？」

「今までの借金は帳消しだ。それにそちらの言い値で買い取るっ」

幸いにして俺は今ちよっぴりお金持ちなのだ、全てを叩いてでも買う価値がこれにはある。

全てをサニーに叩き付け、俺は奴を追い返した。もちろん、これを俺が買い取ったことなどは全て内密にするように頼み込んだあとにだ。

「師匠、俺は追いついてみせます」

そう、いつか約束した場所へ。

『お前なら、近付けるかもしれないな』

あの時には理解できなかった師匠の言葉を目指して。

あの眩きを目指して。

師匠の使った古代魔法への鍵は俺の手の中にある。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7358x/>

---

オストリア雑貨店へようこそ

2011年12月31日23時51分発行